

(図中のつらね)

暫しばしの

つらねそつし莊子いわに曰く。北冥ほくめい

に魚うおあり其その名なを

鯤こんといふ。化けして大あほ

鳥とりとなる。其その翼つばさ

「垂す」天あてんの雲くもの如ごとく。

「ひ」とたびみなみ
一度いちど南みなみせんとほつする

「と」き
時ときは水すゐ撃げ三さん千せん里り。

「扶ふ」揺ように搏はだつて昇のぼる事こと

「九きゅう」万まん里りとかや柿かきの

素す袍はふの羽はづくろひ。氷こほ

「ら」ぬ水みづに筋すぢ隈くまは。根こん元げん

金剛こんがう家の株かぶ。強つよいが自慢じまん

「負まけ」ぬが得手えて。抑そも姓せいは平氏へいじ

の正統しやうとう常陸つひたちの椽貞盛せうさだもりが。肘ここうじ脇わき耳みみ

目めとあまやかし。もて余あましたる僕やつがれは。館たての

金剛丸照忠。当年積つて十八年。最一つ

歌舞妓の十八番。合せて三十六鱗の。

鯉のあら磯荒事師。やつとことつ

ちやア運は天。てんとたまらぬ向ふ

づら。並んだ受も名にしおふ音に

響た金冠白衣。赤いおぢいも顔

揃ひ。動かぬ鹿嶋の要石鯨がうつ

つい姉工故しんぞ命も揚幕から。久し

ぶりでの寒顔見勢。雪にかぢけぬかん

牡丹。真魁の手初めに。妨をする奴ばらは。

神の守田の家の棟から。伊豆と相模の鼻の穴へほぶり込ぞ。

とホ、敬テ白ス